

### (3)内幕話とうわさ話

折に触れて親類が加藤の祖父の家に集まった。そのようなとき、話題はおのずと戦争のことになる。しかし、十分な情報がないなかで、状況の全体を理解することはむつかしく、与えられた情報の欠落を補う「知られざる情報」がないと、状況に対するつじつまが合う解釈には至らない。そういうときにしばしばもちだされるのが「内幕話」と「うわさ話」である。いつの時代も、誰も知らない「内幕話」を知っている、あるいは知っているふりをする人は、「情報通」として尊敬される。かくして情報が十分に与えられない状況では、「ここだけの内幕話」が翼を得る。また世の中に「うわさ話」として、まことしやかに飛びかうことになるのである。情報が統制され、人びとに十分に伝えられなかった戦時中には、さまざまな「うわさ話」が広まっていた。「うわさ話」とは、情報の欠落を補う手段なのである。そういううわさ話を記録したのは、憲兵隊と特高警察だった（「憲兵司令部資料」「東京憲兵隊資料」）。また永井荷風は『断腸亭日乗』（全7巻、岩波書店）に、当時流れていたうわさ話を記録している。永井の記録には虚構が含まれていても、ともに貴重な歴史資料として残された。

そうして私たちは、平和に、のどかに、戦争の話をしながらもその意味を理解せず、

「おそろべき重大な」内幕話をときどき聞きながらも、「おそろべき」ことがわが身に及ぶだろうとは決して考えず、要するに善良な市民として、一九三六年二月二六日が次第に近づいてくるのを、それとは知らずに待っていたのである。（『羊の歌』「二・二六事件」）

ここに描かれる様子は加藤の家のことだけではないだろう。ほとんどの家庭でも同じようであったに違いない。戦時中のことだけではない。2022（令和4）年に始まるウクライナ戦

争に対しても、似たようなことが起きているに違いない。

加藤は生涯を通じて、内幕話やうわさ話を信じなかった。何事も自分で確かめない限り、確信しなかったのである。人物評価についても、位階勲等やうわさ話を評価の基準とはしなかった。